

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02478

研究課題名(和文) 聖なる俗歌 - ロバート・ヘリックの王党派の詩想 -

研究課題名(英文) The Sacred and Secular Poetry: Uncovering Political Intention in the Work of Robert Herrick

研究代表者

古河 美喜子 (Furukawa, Mikiko)

日本大学・工学部・助教

研究者番号：80462125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ヘリック詩集における政治性について研究の軸として掲げてきた二つの柱「田園生活に隠された政治性」と「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」を中心に据えながら、これまでの研究成果をひとつに纏めたものである。リーア・マーカス等の先行研究を踏まえ、17世紀イングランドの王党派詩人口バート・ヘリック(Robert Herrick, 1591-1674)の抒情詩集『ヘスペリデーズ』(Hesperides, 1648)が持つ抒情的で芸術的な価値と社会的で政治的な価値の融合状況において考察を重ね、内乱期のイングランドという特異な時代性や政治的機能等から作品に流れる王党派の詩想について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロバート・ヘリックの抒情詩集『ヘスペリデーズ』が持つ抒情性と社会性の融合、またそれらの一見相反する性質の併存状況がもたらす政治的機能等から作品に流れる王党派の詩想について明らかにすることを目的とし成果をあげた。本研究においてはマーカスの研究が重要な先行研究となっている。しかし、マーカス、さらに続く研究者たちが分析していないヘリックの博物学的興味の中にも、ピューリタン社会や動乱の時代に対する当擦り、ヘリックが元来有する民俗学的また広範な意味での博物学的興味から広がる独特の世界観に根ざした王党派の政治的詩想を見出し、従来の研究に新たな視点を与える内容となっている。

研究成果の概要(英文)：This research reveals the political thought in the work of Robert Herrick by assessing its function as political propaganda for the Cavaliers. In the political context, Leah Marcus has successfully highlighted the political dimension of his poems. I build on her work to illuminate Herrick's study by examining his political intentions through two major themes: "Arcadian living" and "natural history and folklore." This contributes to Herrick's study by unearthing the fact that his insinuations about Puritans and social upheaval are embedded in his interest in natural history, which Marcus did not analyze. Furthermore, it investigates the fusion of lyricism and social criticism in Hesperides in seventeenth-century England. In poetry, the mastery of metaphor and euphemism is directly connected to the avoidance of censorship, which makes it possible to present a political statement to society while maintaining the poem's lyrical values, coexisting without undermining each other's value.

研究分野：イギリス文学

キーワード：17世紀イギリス詩 王党派 ロバート・ヘリック 『ヘスペリデーズ』 政治性 抒情的・芸術的価値 社会的・政治的価値 融合

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

ロバート・ヘリックは1648年『ヘスペリディーズ』(*Hesperides: Or, The Works Both Humane and Divine of Robert Herrick Esq.*)と題する詩集を上梓した。生前、当代きっての宮廷音楽家ヘンリー・ローズ(Henry Lawes, 1596-1662)とウィリアム・ローズ(William Lawes, 1602-45)兄弟によって国王のための曲がつけられて歌となり、一部の人々の間では熱心に読まれ人気があったヘリックであるが、『ヘスペリディーズ』刊行の175年後までは第二版が現れることがなかったとされている。19世紀以降、アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン(Algernon Charles Swinburne, 1837-1909)にアルフレッド・ポラード(Alfred W. Pollard)編ヘリック詩集(1891)序文中で「イングランドの第一流の抒情詩人」(“the first in rank and station of English song-writers”)と評され、『文学の解釈』(*Interpretations of Literature*)第二巻(1916)所収「ヘリック論ノート」(“Notes on Herrick”)中でラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)に「チャールズ一世の時代に歌った詩人のうちで、最高の詩人である」(“the greatest of the Caloline poets — that is to say, of the poets who sang in the time of Charles the First”)と評価されるなど、再評価されその抒情的価値を認められて、文学史上17世紀における代表的な詩人の一人と見做されるようになった。日本における最初の纏まった研究書は1934年の島田謹二『ロバート・ヘリック』であり、ヘリックに対する抒情的評価は、1982年の森亮『ヘリック詩鈔』を経て、日本を代表するヘリック研究家である石井正之助が1987年に出した『ロバート・ヘリック研究』(1968年のヘリック研究書の改訂・補訂版)に集約されている。

20世紀に入ると、従来的に評価を得てきた抒情的側面よりも、寧ろ当時の歴史的社会的状況を踏まえたヘリックの政治的側面が注目されるようになってきた。ヘリックの詩作品における政治的テーマを鮮明にし、上述したような議論の端緒を開いたのは、1980年代に新歴史主義の批評書として出版された著作であるリーア・マーカス(Leah S. Marcus)の『陽気な笑いの政治学』(*The Politics of Mirth: Jonson, Herrick, Milton, Marvell, and the Defense of Old Holiday Pastimes*, 1986)である。以降、アン・ベインズ・コイロ(Ann Baynes Coiro)の『ロバート・ヘリックの「ヘスペリディーズ」とエピグラム・ブックの伝統』(*Robert Herrick's “Hesperides” and the Epigram Book Tradition*, 1988)、今世紀21世紀には、マージョリー・スワン(Marjorie Swann)の『好奇心とテキスト』(*Curiosities and Texts*, 2001)、シリザ・ピュー(Syrithe Pugh)の『ヘリック、ファンショーと「間テキスト性」の政治学』(*Herrick, Fanshawe and the Politics of Intertextuality: Classical Literature and Seventeenth-Century Royalism*, 2010)と、「抒情詩と諷刺詩の境界の曖昧さ」(コイロ)、アイデンティティの観点からの作品分析(スワン)、「間テキスト性」の問題(ピュー)から、政治的文脈の中で読み解かれることが多くなってきている。

ヘリックの『ヘスペリディーズ』は、様々なジャンルの世俗詩1130篇『ヘスペリディーズ』(*Hesperides*)とその巻末に付された宗教詩272篇『ノーブル・ナンバーズ』(*Noble Numbers*: 刊行年は1647年)の併せて1402篇から成る世俗詩と宗教詩との合本という形をとっている。ところが、デヴォンシアの教区牧師らしくサブタイトルに「人間(世俗)と神(宗教)に関する作品」と謳っているものの採録されている詩の数は、世の中の風俗を題材にした世俗的なものが圧倒的に多い。両者を併せた詩集全体の呼称には再度ギリシャ神話に由来する地上楽園を意味する“Hesperides”という語が用いられており、「もっとも輝かしく、もっとも頼もしいウェールズの王子、チャールズ王子に捧ぐ」という文言からは国王チャールズ一世のみならずその息子であるチャールズ二世による理想的世界を描く作品であることが推察される。こうした点に配慮し、従来的に評価を得てきた作家の抒情的側面のみならず、マーカス以降の批評のラインとそれに

より拡大されているヘリック研究における視座、当時の歴史的社会的状況を踏まえ、王党派の政治的プロパガンダとしての機能に焦点を当てて考察を行うこととした。

## 2. 研究の目的

本研究は、これまで科学研究費補助金に採択され行われてきた研究課題三件から得られた成果をもとに、17世紀イングランドの王党派詩人ロバート・ヘリックの抒情詩集『ヘスペリディーズ』が持つ抒情性と社会性の融合、またそれらの一見相反する性質の併存状況がもたらす政治的機能等から作品に流れる王党派の詩想について明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

テキストの分析と考察、文献（研究書・論文・史料）収集、取り組んできた研究成果の整理を行い、研究期間内に、ヘリックの王党派の詩想を纏めるべく研究を進めた。それに伴い、研究の軸として掲げてきた二つの柱、「田園生活に隠された政治性」と「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」は当初設定した小テーマの改訂・削除・修正が加えられ進展していった。こうした取り組みを出版物の形で公開することを目的に、文学と民俗学（博物学）の問題をも考慮に入れながら精査した。

## 4. 研究成果

これまで積み重ねてきたロバート・ヘリック研究の中で、一貫して掲げてきたのは作品が密かに抱えている政治性というテーマであるが、初期近代英文学史におけるこの詩人の位置付け、当時の社会事情や文化を念頭に置き、作品に流れる王党派の詩想について改めて論点を再整理し、単著として取り纏めた。

17世紀英詩研究において、王党派の詩が同時代の形而上詩やミルトン研究と比較して取り上げられることが少ない理由に、修辞学的な詩を読み解く面白さや政治的言説から感じる迫力といったアピールポイントを持たず、その主張がどこか曖昧であり控えめであるという点がある。また王党派詩人たちが他の二つのグループと明らかに異なるところは、前時代のルネサンス精神の受容の仕方であり、例えばヘリック詩についていえばそのような時代精神を肯定的に受け止めることで作品全体に醸し出される「中庸」の精神は、時として作品の意図を解り難いものとする。しかし一方で王党派の「中庸」は当時の政治的言論統制としての検閲を回避するための婉曲表現として機能していたとも考えられ、このような詩的言語による効果が、詩の抒情的な価値を保ちながらも社会的で政治的な意味づけをなし、言い換えれば、政治的でありつつ美学的側面をテキスト中に併存させ文学作品としても成立させようとしている。上記の『ヘスペリディーズ』の抒情性と社会性、或いは美学と政治学の間を行き交う二重性の問題、『ヘスペリディーズ』が持つ抒情的で芸術的な要素と社会的で政治的な要素の融合状況に着目し、分析を行った。

上述の通り、本研究においてはマーカスの研究が重要な先行研究となっている。しかし、マーカス、さらに続く研究者たちが分析していないヘリックの博物学的興味の中にも、ピューリタン社会や動乱の時代に対する当擦り、ヘリックが元来有する民俗学的また広範な意味での博物学的興味から広がる独特の世界観に根ざした王党派の政治的詩想を見出し、従来の研究に学術的独自性と創造性を与え、新たな視点を加えた。

詩人の政治的意図を検討する上で、二つの大きな柱として「田園生活に隠された政治性」及び「博物学・民俗学的興味に隠された政治性」を研究の軸にして取り組み、一見、抒情的な一面を与えるかに見える作品中の穏やかでゆったりとした田園の美景や、そこで繰り広げられる習俗の楽しい様子の描写は、詩人ヘリックにより、ピューリタンたちが嫌った民間信仰・風俗を描くことで主張したピューリタン批判であったことを示した。『ヘスペリディーズ』における抒情

性と社会性の共存は、ヘリックの民俗・博物学的な志向が「田舎や田園での生活を楽しむこと」と「ピューリタンたちの姿勢を忌むこと」とに自然な流れの中で連続性を持たせているためだと考えた。ヘリックの場合、田園の自然や民間信仰・伝説並びに風俗等がピューリタン批判の道具として使われていたことから、ヘリックの民俗学的興味の中にもピューリタン社会や動乱の時代に対する当擦りの言説が内在するためである。

伝記によれば、ロバート・ヘリックによる『ヘスペリディーズ』の出版は1648年であるが、実は1640年4月29日付けでクルック書店から『ヘリック集』の刊行報告が出ているものの某かの理由でその刊行が遅れたとされている。ヘリックが詩集の出版計画からデヴォンシアを離れてロンドンに上京した2年後、1642年の長期議会の国王への反抗から、いわゆるピューリタン革命が開始する当時の状況、王党派の劣勢を考え併せると、検閲の問題から詩集の上梓が当初の計画より遅れたことも考えられる。尚、上述のように、所謂合本というスタイルを取っているこの詩集は、聖と俗という内容、込められた意図等、詩人の内面がそのまま二重写しとなるような構成となっている。また冒頭に配置されている肖像画(版画)は、シェイクスピアやミルトンの詩集の肖像制作でも知られ17世紀イングランドを代表する銅版・挿絵画家であった芸術家マーシャル(William Marshall, fl. 1617-49)によるものであり、ヘリックの詩集に対する誇りと強い意気込みが窺えると共に、中央の詩人の像を取り巻くように背後に描かれているギリシャ・ローマ的な理想郷の風景(ヘリックの創造活動の中心地である Hesperides の園即ち詩人の理想郷)も象徴的である。ピューリタンたちの極端な立場や態度に対する批判をも込めた詩集の出版は、憧憬し理想としたギリシャ・ローマ時代の教えを受け継ぎ伝えるという詩人としての役割を果たすことに繋がっており、自らの王党派詩人としてのアイデンティティを示すものでもあった。マーカス以降の様々な解釈と共に政治的読解の可能性が拓かれてきた詩人口バート・ヘリックの作品に関して、抒情的で芸術的な価値と社会的で政治的な価値の融合の問題、内乱期のイングランドという特異な時代性や政治的機能等から、王党派の詩想について検討を行った。

前述の批評の流れに呼応するかのようには、ヘリック詩集においては近年新版が登場するなど変化が生じており、2013年に二巻本でオックスフォード大学出版局から上梓されたヘリック全集の新版には編者であるトム・ケイン(Tom Cain)とルース・コノリー(Ruth Connolly)により、第二巻において作品に付された音楽(楽譜)が載せられる等、まさにソングライターであるヘリックにふさわしい新詩集の試みもなされているのだが、こうした詩の歌への変換、アダプテーションは、そこから派生する新しい解釈とも結びついてゆくものと思われる。尚、この動きと連動して2008年に開催されたヘリック学会の成果であるヘリック論集『ワインとオイルの主』(*Lords of Wine and Oile: Community and Conviviality in the Poetry of Robert Herrick*, 2011)が出版され、中でマーカスも寄稿しており、『陽気な笑いの政治学』を出して25年近くたった今も未だ愉悦をもたらす『ヘスペリディーズ』の構造に関心を持っていることについて述べ、近代主義を乗り越え80年代を経由して現在へと至るポストモダンの第二の波についても言及している。マーカスの議論も進化しているように、標準版とされてきたL・C・マーティン(L. C. Martin)やJ・マックス・パトリック(J. Max Patrick)等の詩集(解釈)を継承しつつ拓いてゆくこの新版詩集の発刊は、近年のヘリック研究の可能性の広がりを示している。新たに課題として浮かび上がってきたポストモダニズムや「間テクスト性」の問題等も今後の課題として、さらに研究を進展させたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>Mikiko Furukawa   | 4. 巻<br>No. 135     |
| 2. 論文標題<br>‘Herrick’s View of Life: “Carpe Diem” and “Meditation” ’ | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>『比較文化研究』  | 6. 最初と最後の頁<br>87-96 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                                       | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                              | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>古河 美喜子                         | 4. 巻<br>第15号        |
| 2. 論文標題<br>「ヘリックと『カルペ・ディエム』の詩想 その受容と展開 」 | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>『国際文化表現研究』                     | 6. 最初と最後の頁<br>50-65 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし            | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>Mikiko Furukawa  | 4. 巻<br>No. 125     |
| 2. 論文標題<br>‘Herrick’s Whiter Island as Utopia: Comparative Examination of Herrick, Marvell and Walcott ’ | 5. 発行年<br>2017年     |
| 3. 雑誌名<br>『比較文化研究』   | 6. 最初と最後の頁<br>37-45 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>古河美喜子（共著、査読有）   | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>金星堂   | 5. 総ページ数<br>-   |
| 3. 書名<br>『欧米言語文化学会30周年記念論文集』 「『書く』という行為 ロバート・ヘリックと小林多喜二の政治性と芸術性 」（刊行予定） |                 |

|                                   |                 |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>古河美喜子                   | 4. 発行年<br>2018年 |
| 2. 出版社<br>金星堂                     | 5. 総ページ数<br>227 |
| 3. 書名<br>『聖なる俗歌 ロバート・ヘリックの王党派的思想』 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

|   |
|---|
| <p>学会パネルディスカッション<br/>「〔ワークショップ〕テキストとイメージの近代：エンブレム文化の受容と寓意表象の多様性をめぐって シェイクスピア没後400年および漱石没後100年記念ワークショップ」日本比較文学学会 2016年度東北大会 司会・コーディネーター担当，2016年11月26日</p> <p>報告集<br/>「〔ワークショップ〕テキストとイメージの近代：エンブレム文化の受容と寓意表象の多様性をめぐって シェイクスピア没後400年および漱石没後100年記念ワークショップ」日本比較文学学会東北支部会報第22号，2017年3月，pp.6-7</p> |
|---|

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|